

る視点とは、こういうものなのかと考えさせられた。どちらかを希望し、評価を受けたとすれば、社会からは、教育系の大学あるいは研究系の大学との選別を受けるのみで終わる危険が、極めて大きい。地方分権をいわれるさなかの地方が、その地域に存在する国立大学に求めているものは、総合的な知的戦略拠点機能である。私たち高知大学が、「地方大学から地域の大学へ」を改革の目指すところとしている所以は、まさにこの一点にある。地方にある国立大学が総合大学として存在する理由は、少なくともこれからは、この一点によるところが、極めて大きくなると考えている。

ES細胞の研究に対して国家的予算をと、米国で議論されており、その最大理由は、この分野で世界のトップを維持することは、特許をはじめとして、知の世紀のリーダーシップを米国は保持しなければならないからということらしい。勿論、ES細胞が一つの細胞からのことか、生命の宿った細胞由来なのかが論議の根底にあると思っただけでは、人類社会が成り立ってゆかないことを、20世紀を経験した私たちは学んだはずである。自然との共生、環境への配慮が言われる所以である。競争的環境は、問題が功利的であればあるほど、「本当に人類のためになるのか」という学問本来の問

いかけを無力化してしまう。

研究の国家間競争に負けて良いと言っていいのではない。21世紀が知的基盤社会であることを知っているのならば、学術に関わる人たちは、学問の本来を忘れない姿勢を堅持しながら、競争的環境を生き抜かねばならないことなのだ、と言いたいのである。

国立大学法人化のもとでは、二種類の国立大学ができないものか。その上で大学評価が行えないものかと考えている。すなわち教育・研究資源が、既に十分備わった大学のなかから、国家的競争環境に十分立ち向かえる大学を選別してグループ化する。今ひとつは、地方にも中央にも必要とされる人材育成を目的とし、さらには地域の総合的な知の戦略拠点たる機能を果たす地域の大学をグループ化する。この二つの大学群が均衡して高等教育の質を支え、これらのバランスの中で評価も行われる日本の高等教育の場を創り出せないであろうか。大学法人化された我が国の高等教育の場を、人類のためという学問の本来を大切に考えながら、競争的環境を生き抜く人材と、その人たちによってもたらされる成果とが期待される場とすることは、さほど困難なことではないと考えるのであるが。

さがら・ゆうすけ
高知大学 学長